



Title	ハイデガーにおける解釈と言明の主題化
Author(s)	西村, 知紘
Citation	メタフュシカ. 2017, 48, p. 61-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67695
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハイデガーにおける解釈と言明の主題化

西村知紘

序

本稿はハイデガーの著『存在と時間』における理解、解釈、言明の関係性について考察する。ハイデガーは『存在と時間』第1編第5章Aにおいて、人間＝現存在（Dasein）の開示態（Erschlossenheit）の構造契機として情態性（Befindlichkeit）、理解（Verstehen）、語り（Rede）の三つを挙げ、それぞれについて分析しているが、この三つの構造契機の関係性は複雑で、『存在と時間』全体の理解を困難にする要因の一つともなっている。とりわけ、語りがその他の二つに対してどのような関係にあるのかという点で問題が多く、その一例として言明（Aussage）が挙げられる。言明はその言明（Aussage）という言葉の構造からいって、語りの一要素ないし一様態として取り扱われるべきであるように思われるが、実際の論考の構成上は、理解の構造契機についての一連の説明の最後に位置付けられている。したがって言明は理解に基づけられることになる。こうした位置づけによって、言明と語りや言語との関係性がはっきりしなくなっている。

こうした問題を解決するために、本稿では言明と言明を基礎づけている理解や解釈の関係性について検討しなおす。ハイデガーは解釈が理解に基づき、理解において投企された可能性を仕上げることでであると述べている（SZ S.148）ため、一見すると理解と解釈は別個のものであり、理解が第一段階としてあり、第二段階で解釈、第三段階で言明というように展開していくかのように見える。実際にドレイファスの解釈では、理解に対処（coping）が対応させられ、解釈（interpreting）、言明（asserting）の三つの段階に分けて考察されている（Dreyfus, p.195）。その場合解釈は、日常的な配視的配慮において対処できないときに、その理解を見直すために初めて生ずるものであると考えられている。ハイデガーの解釈にそのような理解の深化という側面があることは確かであるが、解釈をそのようなものだけ受け取ってしまうのは、それこそ「狭い解釈」であると言わざるを得ない。これに対して本稿が主張するのは、『存在と時間』における解釈は、理解の一形態なのではなく、あらゆる理解がもつ構造のことであるということである。端的に言えば「理解は常に解釈である」というテーゼでまとめることができる。

従って言明が解釈の一様態であるとするれば、言明もまた解釈に基づいて考察されるべきである。

ハイデガーが述べているように言明がももとの根源的な現象を覆い隠す性格を持つのだとしたら、この隠蔽がどこで、どのように引き起こされているのかを明らかにすることが次の課題となる。そのために本稿が着目するのは「主題化 (Thematisierung)」という概念である。ハイデガーが問題としている言明の性格とはこの主題化のことである。

本稿は以下のような順序で行われる。第一章では『存在と時間』の記述に即して、理解と解釈の関係性を考察し、人間における解釈の普遍的性格を明らかにする。第二章では、第一章で明らかにしたことをもとに、言明の主題化する性格を『存在と時間』公刊 (1927年) の約1年前に行われた1925/26年冬学期の『論理学』講義の内容と比較しつつ考察する。第三章では、言明における主題化と理論化の関係性を考察し、理論化のうちに現象隠蔽の問題点を指摘するとともに理論的科学とハイデガーの存在論の関係性を明らかにする。

第一章 『存在と時間』における理解と解釈

『存在と時間』において言明の問題が扱われるのは第1編第5章「内-存在そのもの」においてである。人間=現存在は世界-内-存在 (In-der-Welt-sein) という根本体制を持っている。つまり現存在は世界の内に存在し、世界の内で現れて来る様々な存在者とのかかわりの中で存在しているということである。『存在と時間』第5章は世界-内-存在の「~の内で存在する (In-Sein)」ということがより具体的にどのようなことであるのかを明らかにする箇所である。上述したように第5章では現存在の開示態の構成要素として、情態性、理解、語りという三つが取り上げられ、言明は、理解の分析に属する。

『存在と時間』の構成上、理解の分析は理解、解釈、言明という三つの節に分けておこなわれる。まず第31節で「理解」がその全体的意味において分析される。この理解をより展開させたものとして第32節において「解釈」の現象が問題となる。そして解釈の一つの派生態として第33節において「言明」がとり上げられることとなる。この構成からすでにわかるように、言明は最終的には理解によって基礎づけられている。さらにこの三つの節を詳細に検討すると以下のことが明らかになる。第31節で分析されている理解とは、基本的に日常的な道具との交渉のことを念頭に置いている。それは非主題的な交渉と言い換えて特徴づけることができる。それに対して、解釈は理解の非主題的な交渉が主題的なものへと変化するきっかけとして働くものである。しかしながら、解釈そのものは必然的に主題的であるわけではない。注意すべきはここで理解と解釈が別々の節で取り上げられているからといって、解釈は理解の特別なあり方のことではなく、理解は常に解釈であり、解釈なしの理解はあり得ないということである。この事実は解釈が理解に基づくとは述べられているにしても、理解の一樣態とは述べられてはいないという点からも明らかである。それに対して言明は、「解釈の派生的様態としての言明」という第33節の題名からも明らかのように、解釈から派生した特殊様態であり、言い換えるならば、言明以外にも様々な解釈が存在し得るということを意味している。本章ではまず理解と解釈という非主題的な要素について考察する。

本章の課題は、理解の深化を伴わないような一つの作業に没頭した行為においても解釈の構造

が含まれていることを示すことである。まず理解を扱った第31節「理解としての現-存在」の内容を検討する。ハイデガーがここで理解として取り扱っているものは、主に可能性と関係のある事柄である。例えばある人がハンマーをふるっているときには必然的にハンマーが何を作るために用いられているのか、その結果作成されるものが自ら自身にとって何の役に立つのかという「主旨 (Worum-willen)」を理解している。この主旨や有意義性 (Bedeutsamkeit) は眼前にある (vorhanden) 「物」としては存在していないけれども、人が自らの主旨と実際にかかわりを持っている限りにおいて、現存在にとってその主旨は可能性として自らに対して開かれている。理解とはこの可能性とかかわりを持っていること、それが自らにとって開示されている (erschlossen) ことを示す用語として使われている。

こうした道具との交渉は、基本的に非主観的に行われる。私がいま目の前のペットボトルを手にとるとしたら、それは私の喉の渇きをいやすためという主旨を持つかもしれないが、こうしたことが常に意識されているわけではないし、もしかしたら本当は喉が渇いているわけではなく、ただ単に退屈な間を持たせるためにお茶を口にただけかもしれない。ハイデガーがこの理解の投企という性格で意図しているのは、可能性というのは固定化されたものではなくて、多層的なものだということである。つまり可能性とは単にまだそれが現実となっていないというだけではなく、そうでもあるし別様でもありうるという性格のことである。現存在が投企 (Entwurf) として可能性へ自らを投げ出す時、それがどこへと着地するかはまだはっきりとしていない。付け加えて言えば、ハイデガーは可能性をこのように捉えることによって行為が常に特定の目的によって引き起こされるという考え方を批判しているとも考えることもできる。

以上のように理解とは可能性のままに世界をとらえることだと考えられる。その場合現存在が関わっている対象は、単に物として固定化されえないだけでなく、一つのものとして集約することもできないものである。なぜなら上述したように可能性は多様な性格をもっているからである。

しかし実際の行為においては理解において与えられている諸々の可能性は、一つのものへと集約される。この機能をなすのが解釈である。解釈において世界の内で出会う存在者は、「或るものとしての或るもの (Etwas als Etwas)」という観点においてとらえられる。例えばこの瞬間にハンマーは釘を打つためのものとして解釈されるわけである。とはいえ、この解釈がまだ科学的な理論的規定とは異なるということに注意しなければならない。「或るものを或るものとして」というのは A als B と記号化することができる。解釈とは「A を B として」解釈するというのである。これをハイデガーは解釈の「として-構造 (Als-Struktur)」と呼ぶ。《として-構造》の A にあたるものは、今の例で言えば「ハンマー」のことであり、B は「釘を打つためのもの」になる。このように解釈することができるためにはハンマーを釘を打つために使うという可能性が前もって開示されていなければならない。その意味においてやはり解釈は理解に基づいているのである。理解とは解釈に先立って先行的に可能性が開示されているということであって、この先行的開示は常に非主観的に行われる。一方で解釈自身はこの先行的な開示から一つの可能性へと制限していく過程であり、これが非主観的に行われるか、主観的に行われるかは決まっていない。

したがって解釈の様態である言明もまたこの構造を持っているのである。つまり主題的言明は無前提に行われる態度のことではなく、非主題的な理解を主題的な理解へと変更するものである限りにおいて非主題性を前提としている。この主題化の変化が具体的にどのようなものであるかについては次章以降で検討する。

ここでまた新たな疑問が生ずる。上で明らかにしたように、理解とは多層的なかたちで可能性と関わることであり、解釈とはそのうちから一つへと固定化する動きである。そうであるとすれば、どのようにして、そのさまざまな可能性のなかから一つの可能性だけが取り出されるということがありうるのであろうか。この問いには、投企が常に被投的投企（geworfener Entwurf）であるということ、あるいは可能性が常に事実的可能性であるということによって答えられる。理解が開示する可能性というのは、不可能なことを除いたすべてという意味での無数の論理的な可能性のことではない。可能性は実存の可能性であって事実性によって規定されている。つまり確かに現存在はさまざまな可能性を持っているが、だからといってその可能性がすべてどれも並列に並んでいるのではなく、特定の可能性への傾向性がある。この性格をハイデガーは以下のように述べている。

現存在は、事実的な現存在として、自らの存在可能をいつもすでに理解のどれかひとつの可能性に偏向させている。（SZ S.146）

さまざまな可能性が存在しているにもかかわらず一つの可能性だけを取り上げるのは、現存在が事実性によって規定されているからである。解釈の分析における次の箇所もこの事実性を説明したものと理解することができる。

およそ理解において開示されたもの、すなわち理解されたものごとは、いつでもそれについてのその「何として」が明瞭に浮かび上がるような仕方で接近可能である。（SZ S.149）

理解されたもの、すなわち A がはっきりとした形で与えられているのは、それが事実的にすでに分節されたものとして与えられているからである。

以上のことから解釈が常に理解を前提としているということは明らかになった。しかし、このことはハイデガーが「解釈は理解に基づく」といっていることからして、当然導き出される結論であるといってよい。本稿ではさらに進んで、「理解なしの解釈はない」ということだけでなく、「解釈なしの理解はない」ということを主張したい。

解釈の作用が目立った形で見えるのは道具の交換などをするときである。ハンマーが壊れたときには私たちははっきりとした形で、このハンマーがこの作業に適しているのかどうかを問題にする。つまり、いままで使ってきたこのハンマーを役に立たないものとして解釈し、向こうにある新しいハンマーを釘を打つのに適したものとして解釈するという具合である。しかしながら道具の交換などを伴わないような、没頭した状態で道具との交渉においても解釈の構造が働いてい

る。つまり、理解が開示する可能性は多様なものであるのだが、それは事実に一つの可能性へと偏向している。いま私がハンマーを使って釘を打っているということ自体が、「ハンマーを釘を打つためのものとして」とらえる解釈によって成立しているのである。一方で理解は一つの可能性に専念しているときであっても、可能性として常に多様なものを開示し続けている。たとえば、順調に作業をしている最中でも、チャイムが鳴ったらその作業をやめるのは、作業とは別の可能性が何らかの形で開示されていたからに他ならない。このように理解と解釈は二つの異なった行為のことでなく、同時に現存在の内-存在を形成している契機であるということが出来る。¹

第二章 解釈と言明への変容

第一節 解釈の明瞭さ

前章において理解と解釈がともに別の作用ではなく、人間＝現存在における解釈の普遍性として明らかになった。このことは漠然とした理解といったようなものが、解釈よりも先に成立することはないということの意味するが、一方で無心での道具の使用と、壊れた道具に手を加えることの間根本的な構造上の違いがないということを帰結することとなる。しかしながら、解釈を取り扱った第 32 節では、一見主題化であるかのように見える記述が多いことは事実であり、それゆえ道具の準備や修理のことだけを述べているかのように見える。その原因となっていると思われるのは、この節でハイデガーが強調して使用する「明瞭な (ausdrücklich)」という表現である。この表現を単純に受け取ると、これまで漠然と理解していた内容が解釈によって意識的な形ではっきりと理解されるようになるという意味になり、解釈とはそのまま道具への注目、さらには道具への主題化という形になるかもしれない。ただし本稿では「明瞭な」というのは「主題化」とは別のことを意味していると主張する。したがって本節では、解釈において「或るものが或るものとして明瞭になる」ということは、非主題的に遂行されうるということを明らかにする。

ハイデガーは道具の使用においてこそ、手許的な (zuhanden) 存在者は端的なものとして見られていると述べる。この端的に (schlicht) ということと対比的に考えられているものは、規定的な言明のことである。

環境内部で手許に存在しているものと配慮的-解釈的に交渉することは、そのものをたとえば机として、ドアとして、車として、橋として「見て」いるけれども、それがそのように配視的に解釈されたものをいつでもすぐに規定的な言明で解釈するというのではない。述語

¹ 解釈の普遍性という意味では、本稿はフォン・ヘルマンの取る立場に近い。フォン・ヘルマンは「現存在の生起 (Daseins-Geschehen)」ないし「超越生起 (Transzendenzgeschehen)」が三つの構造からなっていると主張する。その三つとは、「情態的に投げられること」「理解的に投企すること」「内世界的存在者を解釈的に出会わせること、ないし解釈的に自己顕示的になること (auslegendes Begegnenlassen des innerweltlichen Seienden sowie auslegendes Selbstoffenbarwerden)」である。ここでは、解釈は理解から生ずるのではなく、理解と等根源的に位置づけられている。本稿の論旨に即して理解すれば、この三つの構造によって現存在は成り立っており、全体が《として-構造》を構成しているということが出来る。(von Herrmann, S.94)

付け以前に、手許的なものは端的に見られている。しかもこの端的に見られることが、いつもすでにおのずから理解的－解釈的なのである。(SZ S.149)

『存在と時間』の別の個所で、ハイデガーは「ひとつの道具は決して「存在」しない。道具の存在にはそのつどつねにある道具全体が属している。」(SZ S.68)と述べているように、日常的に道具を使っている状態では、使っている道具は独立した個別の道具として存在することはなく、常に趣向全体性 (Bewandtnisganzheit) の中で理解されている。ハンマーはそれが打つ釘や板との関係なしには理解されえない。逆に言えば、ハンマーがハンマーとして「端的に」見られているということは、ハンマーがそれだけほかの道具とは無関係に、独立に見られているということではなくて、この趣向全体性のうちで適切な形で一つの位置を占めているということの意味するのである。

したがって、ハンマーは趣向全体性のうちでうまく機能すればするほど、すなわちハンマーが例えば釘を打つというその用途に適合すればするほど、ハンマーはハンマーとして端的にみられていることになる。「明瞭な」という形容詞はこのようなハンマーが道具全体の中でその向かう先が正しく示されていることによってハンマーが一つのものとしてはっきりとしてくるという性格を示したものととらえるべきであろう。第32節においてこの表現が強調されて使われる個所は以下の二か所である。

手許的なもののもとの配慮的存在は、世界理解において開示された有意義性にもとづいて、そのつど出会ってくる存在者がいかなる趣向性を持ちうるかを自らに理解させる。配視が発見するということは、すでに理解された世界が解釈されるということの意味する。手許的なものが明瞭に理解する視のうちへと入ってくる。(SZ S.148)

「～のため (Um-zu)」という点について配視的に個々に分けられたものそのもの、すなわち明瞭に理解されたものは、或るものとしての或るもの (Etwas als Etwas) という構造を持っている。(SZ S.149)

「個々に分けられたもの」と訳したドイツ語のもとの動詞 *auseinanderlegen* は「お互いから分けて分解する」という意味とともに、物事を分けて説明するという意味で用いられることもある。解釈 *Auslegung* との語の同類性からしても、ハイデガーはここで解釈という現象のうちに個別に分けていくという性格を見て取ろうとしていることは明らかである。つまりハンマーは釘を打つため、釘は板を固定するため、というように個々のものがその用途へとはっきりと差し向けられることによって、個々の道具は明瞭な理解へと至るのである。このような道具を使うときにはすでに明瞭な理解がなされているのであり、具体的にそれを主題化するという必要性があるわけではない。言い方を変えると、明瞭な形でハンマーを理解しているからこそ、それを使いこなすことができるのであって、決して主題的にハンマーをとらえているからではないのである。

逆の場合としてハンマーの柄が壊れて取れてしまったとする。このときこのハンマーはもはや今まで属していた趣向全体性に入り込むことができない。つまり「何のために」という指示をもはや持たないものとなる。そうはいつでもここで壊れたハンマーがそのまま眼前的な事物へと変容するわけではなく、さしあたってはこの連関に属さないもの、つまり「役に立たないどうしようもないもの」として理解される。

第二節 言明における観点の転換

日常的道具的交渉における理解と解釈は非主題的に行われることが明らかになった。この非主題的理解を主題的なものへと変容させるのが言明の働きである。ハイデガーは『存在と時間』第33節において、言明を解釈の派生的様態として説明している。解釈はすでに述べた《として－構造》のほかに「先－構造 (Vor-Struktur)」によって特徴づけられる。そして解釈の様態という点に関しては「先－構造」から、解釈からの派生という点に関しては「先－構造」に加えて《として－構造》から説明されている。

具体的に『存在と時間』の記述に即して確認すると、論証は次の通りとなっている。解釈は先持 (Vorhabe)、先視 (Vorsicht)、先把握 (Vorgriff) という三つによって構成されており、これが「先－構造」と呼ばれる。そして言明もまたこの三つの構造をもっているため、一つの解釈であることが証明される。先持とは解釈の元となるものであって、例えばハンマーを釘打つためのものと解釈する際に開示されている趣向全体性のことを意味する。先視とは解釈の観点であって、ハンマーは前もって与えられた趣向全体性のうちで、ある一定の観点から例えば釘を打つという観点からみられる。先把握とはハンマーにあてがわれる概念のことであって、釘を打つという観点からみたところ、釘を打つのに適しているということから、このハンマーが「釘を打つためのもの」とみなされることになる。

「ハンマーは重い」という言明もまた解釈の材料となる先持をもっており、それはこの語り掛けられているところのハンマーのことである。それは趣向全体性から切り離されている。こうした趣向全体性から切り離された先持の下では、解釈の観点である先視もまた、趣向全体のなかでの位置づけという観点をもつはずはなく、とにかくこのハンマーの眼前的な性質のうちに観点を求めることによって、このハンマーの属性といったようなものが問われることになる。その属性という観点からみてこのハンマーは「重い」という属性を持っているものとして概念把握されることとなる。このように「先－構造」に即してみた場合、解釈と言明の間では内容は異なるものの三つの構造を持っているという点では共通している。

これに対してあるものが派生であるということは、あるものが、それよりも根源的な別のなにかから変化して生じてくるということである。この場合、より根源的なものと派生的なもの間には普遍的構造と様態という関係は成り立たない。この点で「先－構造」の場合とは異なっている。つまり解釈の《として－構造》と言明の《として－構造》は別のものへと変容しているということである。それゆえに、ハイデガーはそれぞれを「解釈学的《として》」と「アポファンシスの《として》」と名付けている。

ハイデガーが言明について考察する際には、アリストテレスにおけるロゴス・アポファンティコスapophainesthaiの解釈をそこに重ね合わせている。ハイデガーはギリシャ語において言明を意味するアポファイネスタイ apophainesthai とその名詞であるアポファンシス apophansis について、《apo「～から」》という接頭辞の意味を生かして、言明＝アポファンシスは対象となる存在者をその存在者の方から見させるという意味でとらえようとする。したがってこのアポファンシスの意義に即して考えると、主題的になるということはかかわっている存在者が、それ自身のほうから見えるようになるということを意味する。

ハイデガーは言明の特徴を挙示（*Aufzeigung*）、述定（*Prädikation*）、伝達（*Mitteilung*）という三つから説明している。そのうち言明の第一義的な機能は挙示であり、これまでに述べてきた理解や解釈が基本的に非主題的に行われるのに対して、言明によって理解されていたことや、かかわっていた存在者が見えるようになる。言明する際には、その存在者が見えるようにするために、その存在者へと視線が集中することになる。従ってこの存在者は趣向全体性のうちでかかわる道具ではなく、眼前的に存在するものとなる。述定はこの存在者について規定することであるが、規定するためにはこの存在者がやはり眼前に存在しているものでなければならない。規定されることによって概念化され、他者にも理解可能なものとして伝達されるのである。このように言明は対象となる存在者を孤立した眼前的存在者へと変容させていく性格を持っている。しかしながらここで注意しなければならないのは、第33節で述べられている主題的言明が必ずしもすべてが科学における理論的言明と同じものではないということである。科学的考察の場面でなくとも、存在者についての言明を行い、存在者を規定し、他者に向けて明らかにするということは日常的小おこなわれるからである。とはいえ他方で、日常的な言明が理論的な考察が始まる基礎を作っていることは注意しなければならない。

配視的解釈の根源的な《として》を眼前性の規定の《として》へと平板化することが言明の特徴である。なぜなら、そうしてはじめて、言明は純粋に眺めやる挙示の可能性を手に入れるからである。（SZ S.158）

この純粋に眺めやる挙示とは、理論的な考察のことを意味しており、主題的言明のことであると考えられる。したがって言明は《として－構造》を平板化させることによって、理論的考察の可能性を提供している。そこで、この平板化においてどのようなことが起こっているかについてより立ち入って考察しなければならない。

ハイデガーが言明を基本的に主題化と同じものとして考えていたということは、1925/26年冬学期の『論理学』講義からも明らかである。というのもここでの言明の分析は基本的に『存在と時間』と同じであり、言明する作用のことをはっきりと主題化であると述べているからである。言明＝アポファンシスにおける「存在者それ自身の方から」というのは厳密にはどのように考えたらいいたろうか。言明＝アポファンシスが「存在者それ自身の方から」見させることをその本質としているのであれば、反対に言明以外のあり方は存在者それ自身とは別のものから見させる

ということになるはずである。その別のものとは何であろうか。

たとえばここにあるこのチョーク、その黒板、そのドアなどを端的に現に持ち、端的に把握するということは、構造的にみれば、決して或るものを直接的に把握することではない。構造的に見れば、端的に受け取られるものに向かって私は直接近づいていくのではなくて、端的に受け取られるものをいわばあらかじめすでに背後に回り込んだという仕方であって、私はそれを、それが何の役に立つかということの方から理解するのである。(GA21 S.146f.)

この箇所からも分かるように、日常的な交渉において、現存在が存在者と関わる際には、存在者は端的に把握されているのではあるが、その把握は全体の理解によって下支えされている。つまり、個々の存在者は前もってそれが何のためにあるかについての理解があることによって、そこから立ち返ってくるというかたちで端的に把握されることになる。例えばハンマーがハンマーとして端的に把握されるのは、それが釘を打つためのものという趣向全体性の中での位置づけから理解されるのであり、手許的存在者は常に自ら自身とは別の存在者や用途への指示に依存している。

反対に、言明＝アポファンシスは存在者とその存在者それ自身から把握しようとするのであり、その性格をハイデガーは「主題化」という用語を使って表現している。

言明によって遂行されている主題化は、言明の動向、つまり見させるという動向に沿って動いていく。言い換えると、配慮が今やそこへと置かれている言明作用は、今度はアポファインスタイを、また発見することを、純粋にそれ自体として配慮するのである。しかもそれは、この発見することがもはや「何について (Worüber)」をそれとして理解しようとするところのものを、ある他のものから、ある一定の行為から汲み取ってくるという仕方においてはではない。そうではなくて、語りかけられるものが言明においてそれとして理解されるところのものは、語りかけられるものそれ自体から汲み取られるのである。つまり、「何として (als was)」は今やある行為の「何のため」からではなく、言明がそれについてなされるところのものそれ自身から獲得されているということ、これが言明の第一の特色である。(GA21 S.155)

この引用箇所においては、日常的な配視的交渉において特徴的な「～のため」ということと言明の持つ存在者それ自身へと向かう性格がはっきりと対置させられている。言明においては解釈における方向性とは逆向きに存在者があらわになる。つまりこの場合、まず話題となっている存在者が中心となり、この存在者をすべての基準として存在者が明らかになっていくということである。「このハンマーは重すぎる」という言明を例にとると、配慮的交渉の場合では、ハンマーの重さは釘をたたくこととの関係性を意味し、趣向全体性から照らしだされる形でハンマーが現れていたのに対して、これがハンマーを中心としてとらえることによって、この重さはハンマーの

付属物、すなわち属性として変換させられるのである。したがって言明の主題化とは、解釈における観点の転換としてとらえることが可能である。

第三章 言明と主題化

第一節 理論的考察と主題化

しかしながら、主題化については『存在と時間』の記述に即して言うとは奇妙なことがわかる。つまり理解、解釈の分析においては、明らかに言明と対照的に理解や解釈を非主題的だと言い、あるいは直接的に主題的言明という言い方がなされているのにも関わらず、言明を取り扱った第33節においてはなぜか「主題的 (thematisch)」という用語が一度も用いられていない。そして「主題化 (Thematisierung)」という言葉が初めて術語として説明されるのは、そこからかなり後の第2編第4章第69節においてである。この意味を説明するための手掛かりとなるのは『存在と時間』では手許的存在者から眼前的存在者への変容の間に中間状態のようなものを認めようとしている点である。ハイデガーの例に即していうならば「このハンマーは重過ぎる」という言明と「ハンマーは重い」という言明の差である。本稿ではこれを日常的な配視的言明と理論的な主題的言明の違いとしてとらえる。これは一見すると、単に手許的な存在が徐々に純粋な眼前存在へと変化していくということを述べているに過ぎないかのように見える。その場合当然のことながらどの地点において手許的存在者は眼前的存在者へ変わるのかと問われるかもしれない。しかしながら、筆者の主張するところでは、むしろハイデガーの主眼はこの変化の境界ではなく、そもそもこのようにして存在者の存在の理解が変化することが可能であること自体に置かれている。

『存在と時間』第69節では、主題化は以下のように定義されている。

いつもすでになんらかのしかたで出会っている存在者を科学的に投企することによってその存在様相が明瞭に理解され、このために内世界的存在者を純粋に発見する方法も明らかになってくる。このような投企の全体には、存在理解の分節、その存在理解に導かれた事象領域の画定、そしてその存在者に適合した概念組織の予描も含まれている。この全体を、われわれは主題化という。この主題化は、世界の内部で出会う存在者を、それらが純粋な発見に「対して投げられ」、客観となることができるような仕方、明け渡すことを目指している。主題化は客観化するのである。(SZ S.363)

主題化を定義する際にハイデガーが問題としているのは、配慮的交渉から理論的考察への変化の意味である。しかしながら、この問題自身は第1編においても取り扱われている。つまり手許的存在者の眼前的存在者への変容ということである。道具が故障し、機能していた道具連関が途切れたときに道具が目立って来る。このようなことが起きるのは、道具の手許性から眼前性が際立ってくることによってである。しかしながら、確かに眼前的な存在者が目に留まるという意味で、科学的が対象とする存在者と同様の存在者へ変容するのではあるが、それだけで理論的考察になるわけではない。たいていは科学的に規定することなどせず、その道具を修理したり、新しい

ものと取り換えたりすることで再び配慮的交渉へと戻っていく。つまり理論的考察が生ずるためには、その条件として、存在理解を変化させるということが必要である。ハイデガーはこの点について以下のように述べている。

[ハンマーが別の仕方で見えてくるのは] 我々がただハンマーの取り扱いから手を引いているということによるのではない。また我々がこの存在者の道具性格をただ度外視していることによるのではない。それはむしろ、そこに会う存在者を我々が新しく眺める—すなわち眼前的存在者として眺めることによるのである。世界の内部にある存在者との配慮的交渉を先導していた存在理解が転化したのである。(SZ S.361)

道具が壊れた時、その存在者の眼前性が際立ってくるとしても、その存在者を眼前的存在者として理解しているとは限らない。むしろそのハンマーを依然として釘を打つためのものとしてとらえているからこそ、その用途にそぐわない壊れたハンマーが目立ってくるのである。したがって、主題化が可能となるためにはこの存在者を新たに眺めるということが必要になってくる。

ただし、新しく眺めるということは即座に行われるわけではない。ハイデガー自身、眼前的存在者として「受け取る」ということだけで、理論的考察が生ずることに対しては疑問視している。さらに経済学などのように科学は眼前的存在者だけでなく、手許的存在者をも対象とすることができるかのようにみえる。そうだとすると、科学の主題化にとって、眼前的存在者と手許的存在者の違いや両者の変容は必要ではなくなるかのようである。ここでのハイデガーの主張は第1編で明示化された眼前的と手許的という区分を不分明なものへと逆行させているかのようにも見えるがそうではない。ここで注目しなければならないのは、手許的存在者から眼前的存在者へと変転しようということの意味ではなくて、そもそもすでに持っていた存在理解を別のものへと変化させることができるということ自体の重要性である。というのも実際に使っている道具の使いやすさを理解することと、その使いやすさを学問的に他の道具と比較しながら研究している場合とでは、どちらも道具の性格を残しているとはいえ、やはりその存在者に対する存在理解は異なっている。その違いがどこに存在するかといえ、道具との配慮的交渉と、そこから新たに目を向けることができるということである。つまり理論的考察が遂行されているところで重要なことは、ある特定の存在者の存在理解が別の存在理解へと変化していくということではなくて、すでに理解されている存在理解自身へと目を向けるということである。

具体的に言うと、理論的考察というのは使っているハンマーを眼前的存在者として受け取るだけでは生ずることはない。そうではなくて、そのハンマーに関連するそれ以外の存在者をも眼前的存在者としてみるということの意味するのである。その意味において全く違った形で新しく見るのである。

したがって「このハンマーは重過ぎる」という言明は厳密な意味においては主題化ではないことが明らかになる。なぜならたとえこの言明の遂行においてハンマーが眼前的な存在者としてとらえられていたとしても、あくまで関心はこのハンマーのみに集中しており、そのほかの存在者

についてまで眼前的にとらえようとしているわけではないからである。

ハイデガーが指摘した言明の問題点は、存在理解を主導していく主題化にあると考えなければならない。科学による主題化の特徴は「当該の科学の発見がただ眼前的存在者の被発見態のみを予期している」(SZ S.363)という点にあるが、重要なことは眼前的存在者であることよりも、眼前的存在者が発見されるということだけを予期するというありかたの方である。つまり主題化が存在理解を先導することによってほかの存在理解が生ずる可能性を妨げているのである。たとえば「ハンマーが重い」という命題が論理学において主題とされる時には、その主題的対象を「あらゆる分析以前に、最初から「論理的」見方でうけとってしまう」のである。(SZ S.157 強調は筆者による)つまり、主題化においては対象となる存在者をどのように見るかが初めから決まってしまうている。それは今かかわっている存在者に限ったことではなく、現れてくる存在者すべてについて言えることである。

第二節 結びにかえて—主題化と存在論

以上で非主題的理解が主題的になるというときには、二つの段階が存在することが明らかになった。まず第一には『存在と時間』第33節で述べられているように、存在者をその存在者から見えるようにするという言明の機能である。ここで今までは気づかれずに行われていたことがいわば意識的なものとなる。第二にはこの意識的となった内容が科学的主題として規定される。この段階に至ると単なる対象を意識的にとらえているという意味ではなく、その対象をある体系の中で理解していることになる。つまりそこから出会ってくる存在者は、常にある一定の体系の中で、どのように出会ってくるかが期待されることとなる。とはいえ一方で『存在と時間』で行われる現象学や存在論もまた学問のひとつであるから、科学的主題化を行っている。そうだとすると、これらもまた前節で述べたような眼前的存在者への理解の硬化という問題を引き継ぐことになってしまうのではないか。最後にこの点に関して筆者の見解を簡単に述べて本稿を終えたい。

ハイデガーは『存在と時間』第7節において現象学の予備概念を考察する中で、「さしあたりたいていは自らを示さず、さしあたりたいてい自らを示しているものにたいして隠れているもの、しかし同時にさしあたりたいてい自らを示しているものにそなわっていて、その意味と根拠をなすもの」(SZ S.35)を現象学が探求すべき対象となる現象概念として規定し、この現象概念を満たす対象とは存在のことである。そこで現象学は、隠れている存在を取り出さなければならないわけであるが、これは非主題的に理解されている存在を主題的なものとするという作業に他ならない。²

実際にハイデガーは、『存在と時間』の第15節において「存在の主題化」という言葉を用いている。そこで述べられているのは以下のようなことである。現象学的分析による解釈は存在を主題とすることで、したがって常に存在へと目を向けることによって、存在者も環世界的に出会われる存在者となる。ハイデガーがここで一方で存在を主題と言いながら、他方で存在者、ここで

² 『存在と時間』が刊行された1927年に行われた講義「現象学の根本諸問題」においては、現象学の課題が、非主題的に理解されている存在を主題化する試みとしてより強調された形で述べられている。(Vgl. GA24 S.398)

は特に環世界における存在者を「予備主題 (Vor-thematisches)」と呼んでいることに注意しなければならない。つまり手許的存在者が先行的な主題であるということは、存在は本来の主題ではありながら、まだ本来の意味で主題とはなっていないということを意味する。それは先に引用した主題化の定義からもそういえる。というのも、この時点において存在に関して十分な理解や概念組織を手に入れているとは言えないからである。

ハイデガーの現象学的存在論は、主題となっていない存在に目を向けつつ、既存の科学の理論に依拠することなく、言明＝アポファンシスを用いながら存在を見えるようにするという作業である。この場合存在はまだ本来的に主題となっていないという点で、前節で述べた理論的言明の問題を免れているという利点がある。しかしながら、存在が主題化されるやいなや理論化の危険性をはらむことになる。したがってハイデガーの存在論は、最終的な理論化を避けつつ、常に存在を新たに主題化する試みとしてとらえることができる。

(にしむらちひろ 現代思想文化学・博士後期課程)

【凡例】

『存在と時間』(M. Heidegger: *Sein und Zeit*, 19. Aufl.) からの引用は略記号 SZ の後に頁数を示す。ハイデガー全集からの引用は、略記号 GA の後に巻号、頁数を示す。二次文献からの引用は著者の名前の後に頁数を示す。引用は邦訳のある著作については邦訳を参考にしたが、訳を変更したものもある。引用文中の括弧 [] は筆者による補足を示す。

【文献】

F.-W. v. Herrmann: *Subjekt und Dasein. Grundbegriffe von „Sein und Zeit“*, 3. Aufl., Vittorio Klostermann, Frankfurt a. M., 2004

Hubert L. Dreyfus: *Being-in-the-World. A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I*. MIT Press Cambridge, Massachusetts/London, 1991

仲原孝：『ハイデガーの根本洞察—「時間と存在」の挫折と超克』、昭和堂、2008年。

Auslegung und Thematisierung der Aussage in der Philosophie Martin Heideggers Chihiro NISHIMURA

Der vorliegende Text behandelt den Modus der Aussage und dessen Thematisierung in Martin Heideggers *Sein und Zeit*. In *Sein und Zeit* gründen Auslegung und Aussage im Verstehen. Heidegger sieht die Aussage kritisch, weil diese eine Modifikation des ursprünglichen Verstehens bewirken kann. Mein Aufsatz zielt darauf ab, die Struktur dieser Modifikation und ihre Problematik zu erörtern.

Im ersten Kapitel wird der Zusammenhang zwischen Verstehen und Auslegung dargelegt. Daraus ergibt sich, dass die Auslegung nicht nur eine Art des Verstehens, d. h. eine zweckgebundene Überlegung des vagen Verstehens (z. B. bei der Reparatur des Zeugs), sondern schon immer Teil des Verstehens des Daseins ist. Mit anderen Worten: Verstehen ist immer auslegendes Verstehen.

Im zweiten Kapitel wird die Funktion der Auslegung präzisiert. Meiner Ansicht nach zur Folge bedeutet die Ausdrücklichkeit des Verstehens bei der Auslegung nicht die thematische Überlegung des Gegenstandes, sondern Ausdrücklichkeit bedeutet, dass man das Zeug gut gebrauchen kann, d. h. sie ist dasjenige, durch das man sich das Zeug aneignet. Deswegen ist Auslegung nicht immer thematisch, sogar zumeist unthematisch. Dagegen hat die Aussage die Funktion, den Gegenstand thematisch zu machen.

Darüber hinaus hat die Aussage zugleich aber auch immer die Funktion der Thematisierung, die Heidegger als Terminologie verwendet. Das dritte Kapitel unterscheidet die Thematisierung von der alltäglichen thematischen Aussage. In der alltäglichen thematischen Aussage wird einerseits der betreffende Hammer nur thematisch und vorhanden, indem er von der Zeugganzheit getrennt wird. In der Thematisierung ist andererseits nicht nur der Hammer vorhanden, sondern man betrachtet auch alles andere Seiende als das Vorhandene. Wie ich zu zeigen versuche, verweist dieser Perspektivwechsel auf das Problem der Modifikation des ursprünglichen Phänomens.

〔キーワード〕

ハイデガー、『存在と時間』、言明、主題化